

英語リスニングテストが導入されることを受けて

千葉県教育庁教育振興部指導課 指導主事 森 秀 夫

1 はじめに

昭和62年度にA L T（外国人指導助手）を800人規模で導入して、開始されたJ E Tプログラムは、英語教育界の黒船来航と例えられたが、平成16年度に創設18年目を迎え、A L Tも6000人を超える規模となり、順調に成果をあげてきた。

さて、センター試験へのリスニングテストの導入については、平成12年の大学審議会答申「大学入試の改善について」で、その早急な導入の必要性が指摘された。平成15年度には、『英語が使える日本人』の育成のための行動計画の中で、平成18年度にセンター試験へのリスニングテスト導入が盛り込まれ、同年6月に大学入試センターが公表した「平成18年度からの大学入試センター試験の出題教科・科目について（最終まとめ）」の中で、平成18年度から教科「外国語」の科目「英語」でリスニングテストを実施することが明記された。

リスニングテストの成績の利用方法については、各大学の判断となるという

ことであるが、リスニングテストの配点が50点を占めるということは、今後の英語教育界に大きな影響を及ぼすものと思われる。

リスニングテストの実施方法の概要	
試験時間	英語の筆記試験80分の他に30分
配 点	筆記試験200点満点の他に50点満点。
受験方法	英語の受験者は、全員がリスニングテストを受験する。筆記試験のみや、リスニングテストのみの受験登録は認められない。
成績提供と各大学の利用方法	筆記試験の成績とリスニングテストの成績とを区別した上でセットで各大学へ提供する。成績の利用方法については、基本的には各大学の判断となる。

2 学習指導要領における「聞くこと」の位置づけ

「聞くこと」は、学習指導要領の中でどのように扱われてきているのだろうか。旧学習指導要領と現行学習指導要領における「聞くこと」の位置づけを確認するために、英語 I の目標と言語活動等を比較してみる。

	英語 I の目標
旧学習指導要領	話し手や書き手の意向等を理解し、自分の考え等を英語で表現する基礎的な能力を養うとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。
現行学習指導要領	日常的な話題について、聞いたことや読んだことを理解し、情報や考え等を英語で話したり書いたりして伝える基礎的な能力を養うとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。

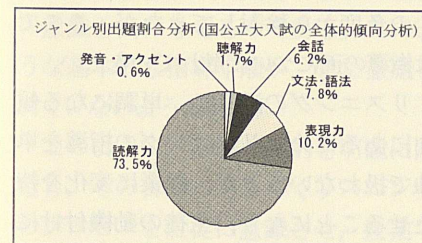
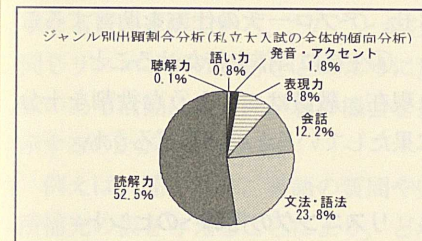
英語 I の目標では、新たに「日常的な話題について」と「情報」が追加されているが、いずれの学習指導要領でも、聞くこと、話すこと、読むこと及び書くことの4領域における言語活動を重視している点では、共通している。しかしながら、これらの4領域については、それぞれ独立して示すことを改

め、有機的な関連を図った「コミュニケーション活動」としての言語活動が示されていることは注目に値する。

千葉県では、平成15年度より県の指導主事による高等学校訪問を実施しており、平成15年度に32校を訪問、平成16年度には55校の訪問を予定している。授業を参観すると「文法訳読中心の授業」、「教員が一方的に話す講義形式の授業」、「英語をほとんど使用しない授業」等を目にすることがある。これらの授業を様々な観点から考察してみると、授業でリスニング力の育成が効果的に行われてきたとは言い難い。

現行学習指導要領においては、4領域が重視され、実践的コミュニケーション能力の育成が一層求められている。このため、聞くことにも焦点が当てられ、その指導を一層充実させるためにリスニングテストが導入されることとなったと考えられる。2004年実施の全国私立大学116大学の問題においては、聴解力を試す問題は、0.1%であり、国公立大学83大学の問題においては、1.7%にすぎない(図1)。(全国大学入試問題正解の私立大編及び国公立大編(2004, 旺文社))すべての大学を対象としたデータではないが、これが、これまでの大学入試における英語出題傾向を顕著に表していることは確かである。

先に述べたように高等学校における指導方法にも問題があると言えるが、読解力偏重ともいえるこれまでの大学入試における出題傾向は、高等学校における英語の指導に大きな影響を及ぼしてきた原因のひとつとなっていたと考えられる。このことから、全国で約57万人もの受験生を対象とする大学入試センター試験におけるリスニングテストの導入が、高等学校の英語教育に及ぼす影響力は計り知れないものがあるといえる。



【図1】

3 What is listening?

リスニング指導の目的は、当然のことながら、生徒のリスニング力を育成することにある。しかしながら、リスニング及びその指導に関する研究が教

育現場において不十分であるように思われる。このことが、「リスニングは受け身的なスキルである。」「毎日英語を聞き続けることだけでリスニング力は向上する。」等の誤解を生み、体系的なリスニングの指導の確立が遅れる原因になっていたと思われる。ここでは、リスニングについて整理してみたい。

(1) リスニングの定義

リスニングについて、Littlewood(2001), Underwood(1997), Rost(1991)は、表現にこそ違いがあるものの、「リスニングとは能動的なスキルである。」としている。

(2) リスニングを成功させるために必要な要素

Rost(1991)は、リスニング力の構成要素として、次の7つを示している。
①音の識別 ②語の認識 ③文法的なまとまりの認識 ④談話的なまとまりである表現と発話の認識 ⑤言語要素とイントネーション、ストレス、ジェスチャー等の関連付け ⑥背景的知識とコンテキストの利用 ⑦重要な単語や考えの想起

教員は、7つのリスニング力の構成要素を念頭に置いて、生徒に何をどのように指導していけば、効果があがるのであろうか。

(3) リスニングを困難にしている要素
リスニング力を育成することは、なぜ難しいのでしょうか。Underwood (1997) は、リスニングを困難にしている要素として、次の7つを示している。①聞き手が話し手のスピードを管理できない点 ②録音されたもの以外は、繰り返されない点 ③聞き手の限られた単語力 ④理解を助ける談話標識を認識できない点 ⑤ジェスチャーや表情を含めた聞き手の解釈の問題 ⑥集中が続かない点 ⑦予期せぬ事態に対応できる学習習慣が確立されていない点

以上のような困難を克服するため、教員はどのようなことに注意する必要があるのだろうか。

(4) リスニング力を育成するための方策

Rost (1991) は、リスニング力を育成するための方策を4つ提案している。①直接のインタラクション ②意味に焦点を当て、新しく重要な内容を理解することに焦点を当てること ③理解するための活動を取り入れること ④意味を理解するための活動に焦点を当てながら、正確な音や単語の認知に焦点を当てること

学校現場におけるリスニングの指導では、CDを流し、解答の確認をする

だけですませる活動が散見するが、単に聞かせるだけの活動だけでは、リスニングテストをしているにすぎず、十分な指導とはいえない。

(5) リスニング指導における教員の役割

Underwood (1997) は、教員の役割について次の4つを提案している。①様々な素材のリスニングをさせること ②リスニングを目的のある活動にすること ③リスニングのプロセスを意識させ、アプローチの仕方を助言すること ④生徒に自信を持たせること

現在、教員はこのような役割を十分に果たしているといえるだろうか。

4 リスニングの指導へのヒント

これまでリスニングについていくつかの角度から検討してきたが、ここでは指導の面について触れていきたい。

リスニングの活動は、単調になる傾向にあるため、リスニングの指導を単独で扱わないことが、授業に変化を持たせることになり、生徒の動機付けにつながる。

これまで高等学校においては、リスニング力の育成は、オーラルコミュニケーションの授業において行われる傾向にあった。しかしながら、日本におけるEFL(外国語としての英語)という学習環境や高等学校における限ら

れた時間数の中で、リスニングの指導をより効果的なものにするためには、他のスキルとの有機的な関連を図ることが大切である。

それでは、リスニング力を育成するためには、どのような指導を考えるべきであろうか。

(1) リスニングに目的のあるタスクを設定する

リスニングを何度繰り返しても、意味のない音であれば、生徒にとっては、単なる音の連続である。このことから、同じリスニングの素材をどのように意味のある活動に変え、学習の機会を提示するのが大切である。

例えば、聞く前に、英語の質問や空所補充の表を与えることにより、どんな点に注意を払って聞くべきかに生徒の意識を向けさせるのである。このような基本的な指導手順が、まだ徹底されていないようである。

このように、活動の目的を明確に設定し、その目的にもとづくリスニングのプロセスを生徒に意識させ、授業で生徒が目的を達成できたかどうかを評価することも大切である。

(2) さまざまな段階的指導を心がける

教員は、pre-listening activities, during-listening activities, post-listening activitiesのそれぞれの意義

を踏まえて、生徒の学習段階に応じて指導することが大切である。リスニング前後の活動を工夫することにより、生徒同士のペアワークや教員とのインタラクションを増やし、できるだけ多くの英語に接する機会を与えることになる。例えば、pre-では、当該テーマに関するbrainstormingや内容予測、during-では、内容についてのfact-finding questions や inferential questions, post-では、要約の作成や内容に関する意見の発表等が考えられる。

発音や音声現象等に関するbottom-upタスクと聞き手のスキーマや内容についての予測等の活用を重視するtop-downタスク、または両方のタイプのタスクをリスニングの指導に組み入れることが大切である。どの科目においても、科目の特色を生かしながら、オーラルイントロダクション、Q&Aやダイアログ等を導入する中で、リスニングやスピーキングを含めて、4領域を意識して指導することも大切である。

(3) インタラクティブな活動を工夫する

通常のディクテーションは、「聞いたことを書き取る活動」であり、インタラクティブな活動であるとはいえない。しかし、例えばRinvoluceri (1998) の Dictoglossにもとづくグラマーディク

テーションという手法をとることで、インタラクティブな活動に変えることができる。グラマーディクテーションでは、聞き取った英語について、他の生徒と情報交換をすることになり、お互いに英語で話したり、聞いたりする場を確保しながら、内容理解を深めることにつながる。このように、メッセージの授受を行う活動を常に設定することが大切である。この方法は、英語の文章を用いることで、どの科目においても指導の一環として活用できる活動である。

指導手順は、次のとおりである。

①何も書かずに、英文全体を聞いて、概要把握に努める。②概要について、できるだけ多く書き取る。③書き取った文を一文ずつ口頭で確認しながら、グループ内の全員が同じ英文になるまで英語で話し合う。④グループ内で共通の解答ができた後、正解を見ながら、一語一語、丁寧に添削する。⑤再度スクリプトを見ながら、英語を聞いて、全体が理解できるかを確認する。

(4) ダイアログ形式で要約を作成する

英語 I, II 等の指導で、すべての英語の文章をダイアログ形式に書き直して、指導に活用する。英語の文章を要約したり、書き換えたりする能力が求められるので、教員としての英語力

の向上にもつながる活動である。

例えば、異なる箇所に空欄のある、AとB 2種類のプリントを用意することで、インフォメーションギャップ活動を行うことができる。また、ダイアログの最後の部分をopen-endにすることで、生徒の自由な発言を期待できる。この活動を通して、スピーキング力とリスニング力の向上を図る指導につなげることができる。

(5) クラスルームイングリッシュを使う

生徒が英語に接する機会をより増やすために、教員はできるだけ多くクラスルームイングリッシュを使う必要がある。その結果、教員の英語に生徒が反応することで、その生徒の発言を他の生徒が聞くことにつながる。授業において、英語が主たるコミュニケーションの手段であることにより、生徒の聞く習慣や態度を育成できると考える。

生徒のrole modelになるには、教員は自分の英語力を高める必要があり、英語力を高める努力を続けない教員は、生徒が目標とする存在にはなりえない。例えば、英語の資格試験を目標にすることも、教員が自らの研修を積む上で有効である。教員が自らの英語力を高める努力を続けている姿は、生徒にとっても新鮮な刺激となることであろう。教科書以外に、英字新聞や週刊誌の購

読、ビデオ、ラジオやテレビ講座を利用することにより、英語力を高める努力を続けたいものである。

大切なことは、教員が単に英語を話すことではなく、生徒の実態を把握し、生徒の学習段階に応じた英語を話すことであり、それにより生徒に何かを伝えることである。また、英語を話すことが、教員の自己満足で終わることだけは避けなければならない。

なお、教科書の指導書にある英語のoral- introductionの英文を、そのまま授業で利用することも考えられるが、教材を読みこみ、よく理解し、自分の英語として発言しなければ、どんなに流暢な英語でも、生徒にはうまく伝わらないことが多い。生徒の興味・関心のありそうな話題、ニュース等については、自分の考えを英語で語りかけることにより、生きた英語を伝えることができる。毎日の授業で英語を話し続けることは、生徒の英語力はもちろん教員の英語力の向上にも役に立つ。

(6) 単語や慣用表現をactiveにする

単語や慣用表現をactiveにすることで、英文の構造に対する背景的知识が活性化される。その結果として、リスニングの際に予測することが容易になると考えられる。

「単語の意味を知っている」段階から、「単語を使うことのできる」段階へ

導くことが大切なのである。英語 I, II 等の指導において、単語の確認と称して、意味や派生語を確認した後に発音の練習をする授業を参観することが多い。しかし、その活動だけで、どの程度、生徒は単語の定着を図ることができるのであろうか。教員でも、ある単語を使えるようになるためには、日常生活で意識して口に出したり、書いたりして実際に使うことが必要なのである。ましてや、生徒にとっては、授業中に定着させるための場面を設定しないで、どこでどのように定着を図るのであろうか。単語や慣用表現について、すべての定着を図るための活動は難しい。しかしながら、単語や慣用表現をactiveなものにする指導を工夫することが大切である。

例えば、単語の同義語や定義を英語で説明し、どの単語の定義かを推理させることは、リスニング活動につながる。クイズ形式となるので、生徒も積極的に取り組める。

また、英語を通して、単語を理解した後に、英語を使う場の設定をする。例えば、familiar が教材に出てきた場合、意味やスペルを覚えて発音練習をしても、実際の場面で役に立たないかもしれない。This picture is familiar to me. と生徒に口に出して言わせたり、書かせたりする。その後には、be familiar toの部分を利用するという条

件をつけて、生徒に他の英文を作らせる。生徒に関係することを英語で表現させる活動を通して、コミュニケーション能力を育成することは大切である。

(7) 意味単位の直聴直解や直読直解を取り入れる

リスニングにおいては、リーディングと違い、理解するときに逆戻りすることができない。そのため日本語と語順が大きく異なる英語において、リスニングの指導をする場合、英語のスピードが速くなればなるほど、語順に従って前から理解していくことが不可欠になる。語順どおりに理解できないと「英語は聞こえる。」が、「英語の内容は理解できない。」という現象が起きる。語順どおりに理解するには、意味単位ごとに理解するとともに意味単位ごとにリピティングをすることが効果的である。また、単に音を繰り返すだけでなく、意味を理解しながら、繰り返すことで、英語の文の構造に対する理解も深まる。

英語 I, II 等で、英文を意味単位でとらえ、逆戻りしないで読むことを指導することが、速読力はもちろんリスニング力の育成にもつながる。なお、武井(2002)らは、意味のまとまりを意識させる指導は、学習者のリスニングにおける理解度を増すという先行研究の成果を紹介している。

(8) self-learner への意識をはぐくむ

日本における英語の学習環境では、リスニングの指導だけでなく、self-learner への意識をはぐくむために、リスニング学習を続けるための方法やよい教材を紹介することも大切である。リスニング力を改善するために教員自身が実践して成功した方法等をとおして、生徒に家庭学習について考えさせることも有効である。教員の実践例は、説得力を持つものである。

例えば、ラジオ講座の利用を紹介する場合でも、2通りの例が考えられる。例1「毎日ラジオ講座を聞きなさい。毎日聞くことで英語が聞こえるようになるものである。継続は力である。」

例2「毎日ラジオ講座を聞くことは大切である。ただし、効率よく聞くためには、録音して何度も聞くだけでなく、テキストを読む前にラジオを聞いて内容を理解し、できればディクテーションをする。そして、ディクテーションで書き取れなかった箇所を、テキストを開いて確認する。その後に、聞き取れなかった箇所を中心に聞き直し、本日のキーセンテンスを覚える。慣れてきたら、シャドウイング等を試してみても、すべて文を覚えるまで繰り返すと効果的である。」さらに、「覚えたことを実際に使うことで、音が身体に浸透していく。聞きっぱなしにした英語は、忘れやすい。忘れないようにするため

には、何度も繰り返し書いたり、発音したりして、覚えたことを具体的な場面で使うことが大切である。発音できない単語は、聞いても聞こえるようにならない。」

例2のように、教員自身の経験をとおして具体的に指導する方が、説得力があり、効果があると考ええる。

リスニングに苦手意識のある教員は、リスニングテストの導入を契機として、自分のリスニング力を向上させるための手段を講じ、その経験にもとづき指導することが求められる。

(9) 聞き方を指導する

リスニングで、全部聞き取れることを意識しすぎると、概要が頭に残らないことがある。Littlewood (2001) は、一部を聞き逃しても、他の文脈から概要を推測することが可能であるとしている。また、英語を聞いているときにわからない語句に遭遇すると、そこでつまずいて後を聞き漏らしたり、理解する努力を放棄してしまう場合がある。リスニングというと、言われていることをそのまますべて聞き取ることと考える傾向にあるが、日本語で何かを聞き取る時も、必要な情報だけを聞き取るのが普通である。言語が違うのであるから、言葉を一字一句100%聞き取れなくてもコミュニケーションが成り立てばよいという姿勢を育てるのである。

このため、「文脈から概要を推測すること」、「機能語よりも内容語が強く発音されること」、「旧情報よりも新情報等が強く発音されること」や「理解できない単語に遭遇しても、聞き続けることの重要性」等の意識を育てるための指導をすることが大切である。

(10) 本物志向で英語の授業を楽しむ

高等学校のリスニング指導では、教科書付属のテープを用いることが多い。しかしながら、付属テープには不自然なスピード、理解を妨げるノイズのカットや理解を助けるはずの redundant information の欠如等で、質的にも量的にも課題を残している。これらの課題を解決するためには、authentic なビデオやDVD等の豊富なソフトの利用が考えられる。ただし、ソフトを効果的に利用するためには、プリント等の作成が必要になり、教員にかなりの努力と工夫が求められる。このため学校でソフトを利用する際には、他の教員との共通理解のもと連携を図り、役割分担をすることが必要である。

authentic なソフトを利用することは、教員の英語力の向上につながることになるため、授業の教材開発を楽しむ姿勢が大切である。

5 おわりに

同じ時期に英語圏に1年間の留学を

した生徒が2名いた。留学前に持っていた英語の文法力、単語力等の差がものをいい、2名の間には1年間で英語力に相当の差が開く結果になった。英語圏に留学しても、英語力を伸ばせる留学生と伸ばせない留学生がいるということになる。基本となる英語に関する知識、つまりpassiveな知識が無ければ、activeに変えることはできない。そういう意味で、4領域、単語力や文法力は、すべて大切であるといえる。

リスニングにおいては、英文の構造、単語や音声的なもの等に関する総合的な英語力が求められ、リスニングテスト導入の意義は極めて大きい。ただし、設問がパターン化すると、どの設問に対しても受験対策がとりやすくなり、本来の英語力を問う意図からはずれる恐れがある。今までも、読解問題の対策として背景的知識を活性化するための問題集、語法や文法の対策として英文法問題集を用い対策を講じることで、ある程度の得点をとることが可能であった。

しかしながら、今求められていることは、単に知識・理解の蓄積・確認ではなく、問題解決能力や生きる力である。リスニングテスト導入を否定的に受けとめるのではなく、黒船来航が文明開化への契機となったように、肯定的に受けとめて欲しい。実践的コミュニケーション能力を育成するために、

リスニングテストの導入が日本の英語教育改善への契機となることを切に願う。

参考文献

- Davis, Paul and Rinvoluceri, Mario (1988) . Dictation. OUP.
 Mary, Underwood (1997) . Teaching Listening. Longman.
 Michael, Rost (1991) . LISTENING IN ACTION Prentice Hall.
 William, Littlewood (2001) . Communicative Learning Teaching. Cambridge University Press.

全国大学入試問題正解の私立大編及び
 国公立大編(2005) 旺文社

武井 昭江編著(2002) 英語リスニング論 河源社

文部省(平成11年) 高等学校学習指導要領解説編 外国語編 英語編 開隆堂出版

米山朝二(2003) 英語教育指導法事典 研究社